

ギザ

山田 綾乃*

1. はじめに

ギザ遺跡は、首都カイロの南西にあり、ピラミッドとマスタバ墓に代表される古王国時代（第4王朝～第6王朝）の墓地遺跡である（Fig.1）。3基のピラミッドを中心に、同時代のマスタバ墓が規格性をもってそれらの周囲に造営されている。またそれらのピラミッドの造営に関わった労働者の住居址（以下「ピラミッド・タウン」と記載）も発見されている（Lehner 2007）。新王国時代になって再びギザが信仰の中心となる時期が訪れ、例えばトトメス4世はスフィンクス神殿に付随する新たな神殿を造営した。末期王朝時代にはクフ王の王妃のピラミッドのうちの1基がイシス神殿に改築され、再度信仰を集める地となった（近藤、河合 2011）。エジプト最大のピラミッドを有するギザ遺跡は、その顕著で普遍的な価値を大いに認められ、1979年に「メンフィスとそのネクロポリス：ギザからダハシュールのピラミッド地帯」が世界遺産に登録される際の中核を成している。

また、1979年の世界遺産登録以前から現在に至るまで、ギザ遺跡はエジプトの観光産業の中核でもある。世界的に最も多くの注目を集める古代遺跡であり、カイロ市内から約12kmとアクセスも良いため、文化遺産としての価値とともに、観光資源としての価値も非常に高い。そのためギザ遺跡における遺跡保存整備は観光

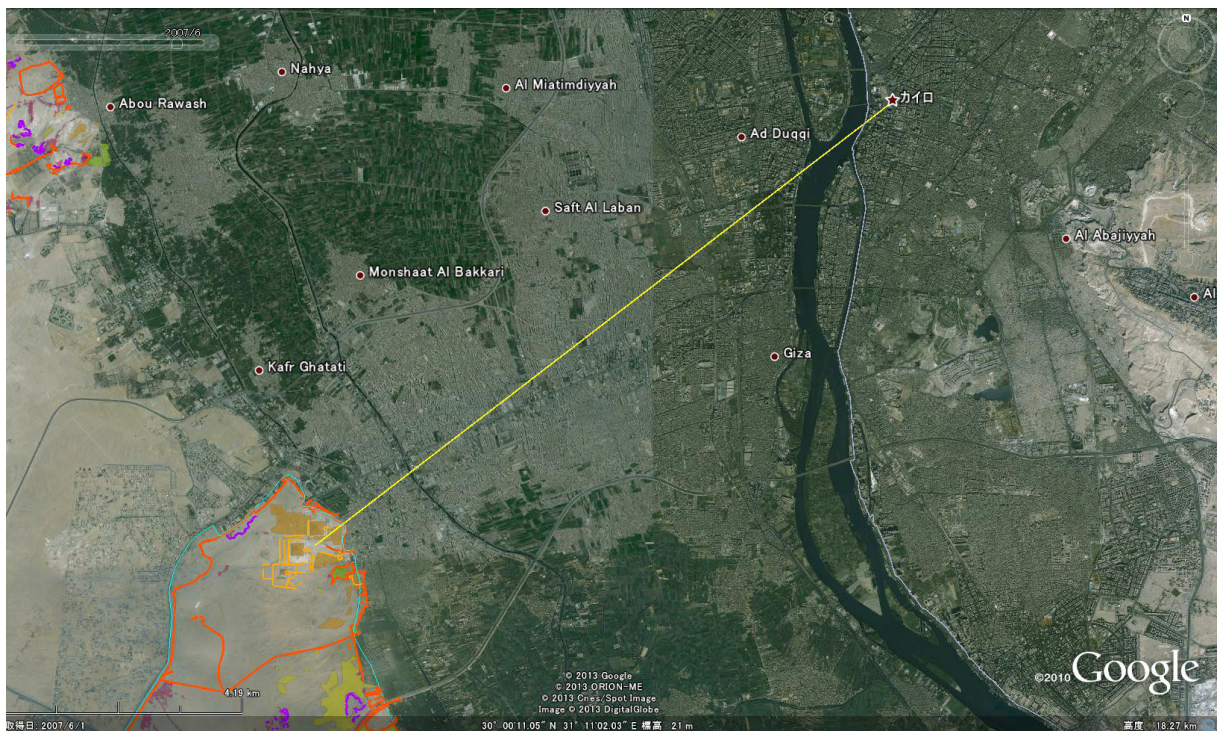


Fig.1 カイロ中心街との位置関係

* 早稲田大学文学研究科考古学コース修士課程

資源としての有効利用を中心に議論され、遂行されてきた。一方で世界遺産委員会では、ギザ遺跡周辺の都市化やインフラ整備に伴う遺跡破壊や脅威に対して、度重なる警告と対策の立案が要請されている（高橋 2011; 西坂 2011）。

よって本稿では、ギザ遺跡のエジプト学的特質および特徴についてまとめ、現在進行中の発掘調査・研究を含めたギザ遺跡の重要性について概括する。さらに実際にギザ遺跡を踏査して得た、遺跡管理の現状を報告する。ギザ遺跡の文化財保存を目的とした遺跡保存整備の問題点を洗い出し、今後の遺跡保存整備計画の方向性について予察を与えることが目的である。

2. エジプト学的特質および特徴

ギザ遺跡は主に古王国時代の墓地遺跡として、ピラミッドとその周辺施設、そしてマスタバ墓によって構成されている¹⁾ (Fig.2)。主に第4王朝から第6王朝にかけて利用され、新王国時代にはスフィンクス周辺で再び建設活動が行われ、末期王朝時代にはイシス信仰の中心としても栄えた²⁾。ギザ遺跡はエジプト学開始当初から認知されており、複数の旅行者や考古学者によって記録が残されている。また本格的な発掘調査は1900年代初頭に開始され、現在に至るまで考古学、エジプト学、建築学などの多方面から研究を蓄積してきた (Hassan 1932-1960; Hawass 1997; Junker 1929-1955; Lehner 1997; Petrie 1883; Reisner 1931, 1942-55; Romer 2007)。とりわけピラミッドはエジプトを代表する遺跡であり、古代エジプトの政治・経済・社会・文化・宗教のいずれにも多大な影響を及ぼしている。

中でも、建築学的側面から見た石造建造物の築造技術の研究は、ギザ遺跡を最も特徴づけているといえる。研究分野としてはたとえば、石灰岩の採石技術、石材の運搬方法やルート、石積み技法、測量の手法などが挙げられる (Arnold 1991; Stadelmann 1985)。これらはピラミッドを初めとした石造建造物の築造の基礎的研究として発展し、大きな成果を挙げている。

一方、考古学およびエジプト学的側面からは、ギザ遺跡が利用された第4～6王朝における埋葬習慣や生活習慣の詳細が明らかにされている。たとえば、スネフェル王の妻でクフ王の母であるヘテプヘレス王妃のシャフト墓からは、豪華絢爛な副葬品の品々が未盗掘の状態で見つかった (Lehner 1985; Reisner 1955)。現在その副葬品はカイロ博物館に展示されており、古王国時代の王族の副葬品の詳細を今に伝えている。一方、マスタバ墓からは、高官や役人の古代の生活を窺い知ることのできる土器や彫像などの遺物が多数出土している。土器からは、古王国時代の供物奉獻や祭祀活動の様子を窺い知ることができる。またマスタバ墓に描かれる壁画の多くは、葬送儀礼に関わるテーマと日常生活に関わるテーマが中心である。従って、祭祀活動の他に、人々がどのような衣食住の環境のもと生活していたかを図像資料および文字資料から追認することができる。文字資料としては他に、石材に記されたインスクリプションがある。これらは建造の際に書かれる労働者組織の名称や建造の際の記号として知られており (Roth 1991)、クフ王の船坑からはまとまった出土が確認されている (Abu-Bakr 1971; 吉村 2011)。

同じく当時の生活様式を研究する遺跡として「ピラミッド・タウン」が重要である。カフラー王の葬祭殿の南東、段丘の縁辺に広がるピラミッド造営に関わった労働者の町の跡であるこの遺跡からは、土器や封泥、動植物遺存体などが多く出土し、労働者層の住居址や日常生活の一端が明らかにされている (Lehner 1997)。

以上のように、ギザ遺跡はとりわけ古王国時代の最盛期の様子を色濃く伝える遺跡である。他遺跡と比較しても、ピラミッドがあることによりいち早く周辺の墓域が認識され、発掘調査が行われことで、豊富な資料が保存され、現在も研究の対象であり続けている。また石造建造物の上部構造の残存状態も比較的良好的なため、ピラミッド史に代表される建築学的研究分野では欠かすことの出来ない遺跡である。

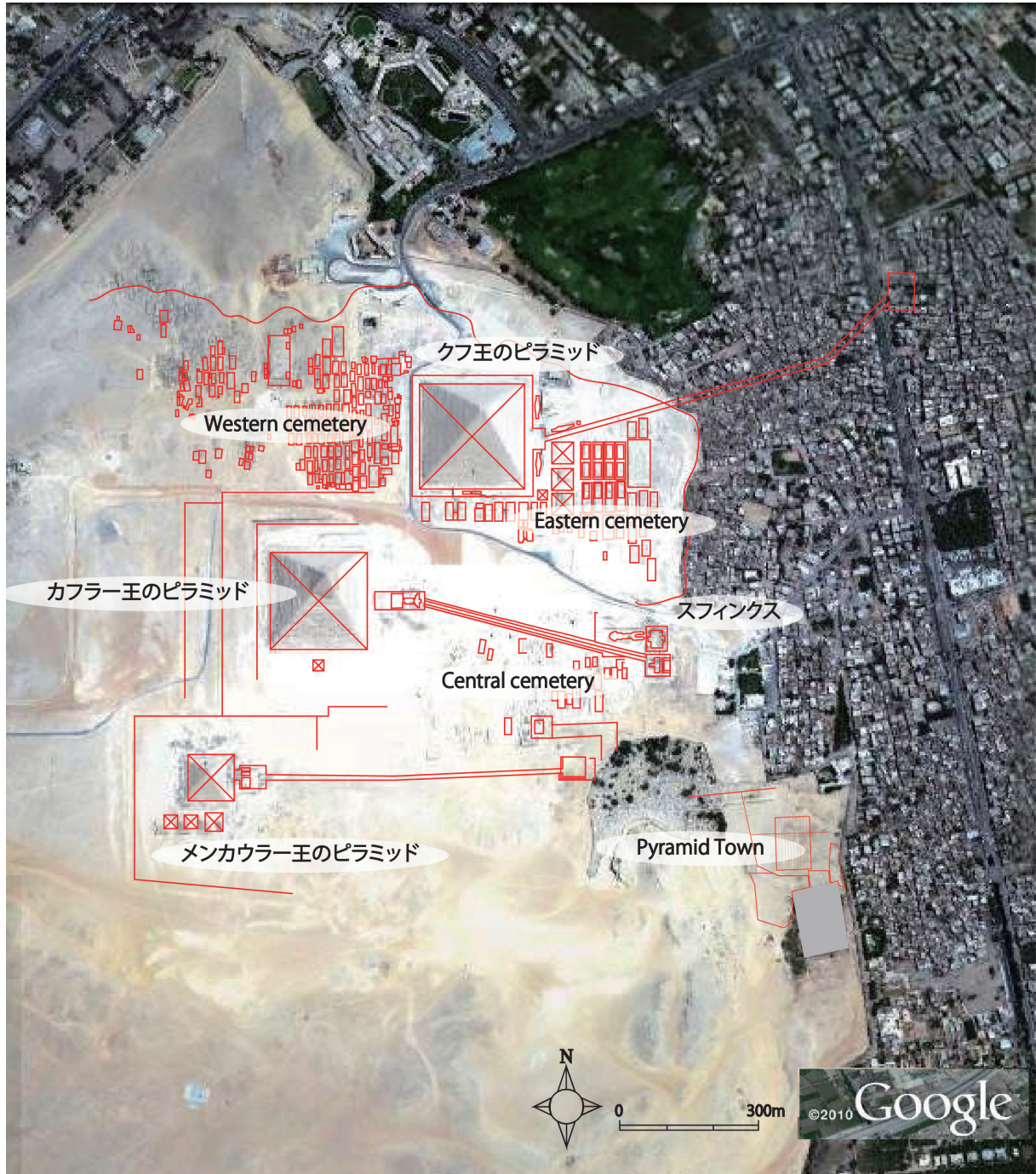


Fig.2 ギザ遺跡地図

尚、現在はエジプト隊、アメリカ隊、日本隊が当遺跡で発掘調査を継続している。それぞれマスタバ墓、「ピラミッド・タウン」、クフ王第2の船と非常に重要な遺跡であり、新たな考古学的資料の発見と研究の蓄積が期待される。

ギザ遺跡の特徴としてもう一点、デジタル・アーカイブの促進についても言及する。近年、発掘報告書や論文のデジタル・アーカイブ化の流れを受けて、ギザ遺跡に関わる多くの資料が Web 上で閲覧可能となっている³⁾。中には古写真や発掘担当者の手記などの未発表資料も多数アップロードされており、研究者が自由に使用することが許可されている。発掘報告書や論文の PDF、地図データ等も公開されているため、研究を行う上での利便性は格段に向上した。同じくアーカイブを目的とした調査として、マーク・レーナー氏率いるアメリカ隊は、ギザ台地をくまなく測量し、ギザ台地の地形把握や台地利用について研究する Giza Mapping Project を実施している。またハーバード大学のピーター・マニュエリアン氏と民間の3次元モデル製作チームは、オンライン上でギザ遺跡をバーチャル見学することの出来る Web サイトを公開している⁴⁾。

このような遺跡に関するあらゆる資料のデジタル・アーカイブ化は、エジプトでは、ギザ遺跡が最も進んでいる。今後も増え続けていくエジプト学の資料の保存と活用といった観点から、他遺跡でも同様にデジタル・アーカイブ化が進むことが予想される。ギザ遺跡はそのモデルケースとしても重要な遺跡である。

3. 遺跡保存整備の現状

ギザ遺跡の保存整備に関する提言、現状、そしてその対応策については、ユネスコ世界遺産会議やエジプト学の学会など数々の場で議論が重ねられてきた (Hawass 1995, 2002, 2003, 2008; Mabbitt 1992; Mayer 2003; Weeks 2003; 高橋 2011)。エジプト政府、ユネスコ、そしてエジプト学者の多くの関心を集めており、早急に対応策を講じるべき状況にあることは広く認識されているといえるだろう。ただし、提案された保存整備計画のすべてが実行に移されたわけではなく、またエジプト政府が提出した保存整備計画と世界遺産委員会が要求する保存整備計画には、その水準と認識において大きな隔りがあることもすでに指摘されている (西坂 2011)。

このような状況を踏まえ、本節では、ギザ遺跡の保存整備の現状を、2013年2月現在の最新の踏査結果を中心に報告する。

(1) 遺跡の公開状況

2013年2月現在、ギザ遺跡内で公開されている遺跡を以下に挙げる (Fig.3)。

- ・クフ王のピラミッド内部
- ・カフラー王のピラミッド内部
- ・メンカウラー王のピラミッド内部
- ・太陽の船博物館
- ・マスタバ墓： G 7530-7540 (Meresankh III); G 5080 (Seshefnufer II); G 7070 (Snefrukhaf)
G 4761 (Nefer I); G 2196 (Iasen); G 4561 (Kaemankh)
- ・カフラー王の河岸神殿

ギザ遺跡における各遺跡の公開に関する直近のアナウンスは、2012年10月にエジプト考古省より発表されている⁵⁾。このとき、修復・強化措置を終えたカフラー王のピラミッド内部の他、6基のマスタバ墓の公開が告示された。その他に、以前から公開されていた2基のピラミッドと、カフラー王の河岸神殿も継続して公開されている。3基のピラミッドの周辺施設は、屋外施設である場合はそのまま見学可能である。ただし、2012年夏まで公開されていた王妃のピラミッドは現在閉鎖されている。また現在公開されているマスタバ墓は Western cemetery に4基、Eastern cemetery に2基⁶⁾で、Central cemetery で公開されているマスタバはない。

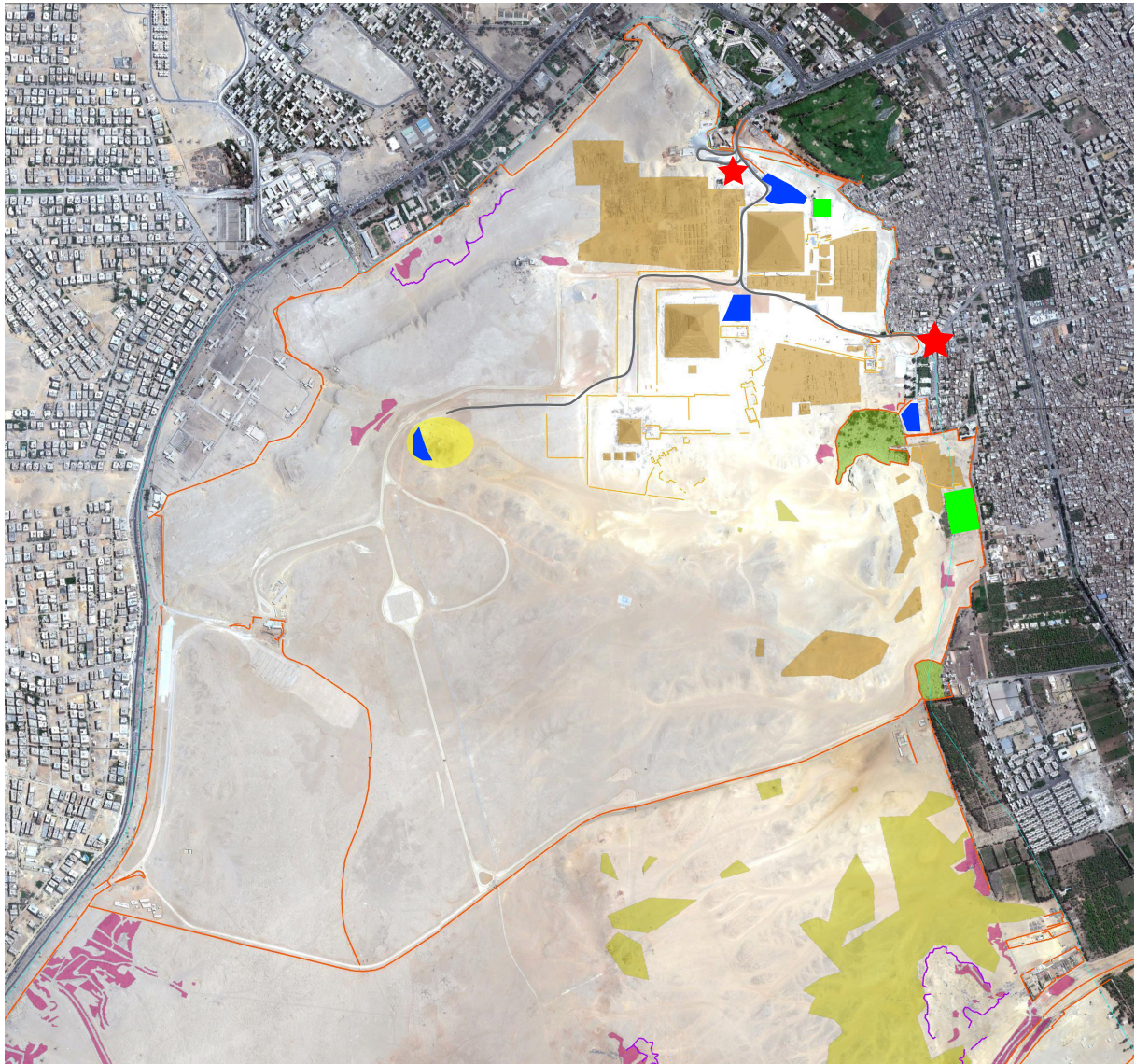


Fig.3 公開遺跡および遺跡整備状

- 凡例：☆ 入口
 青 駐車状
 黄色 ビュー・ポイント
 緑 近現代建造物

尚、スフィンクスは保存修復作業が継続されているため、スフィンクス神殿および新王国時代に増築された神殿域を含め立ち入り禁止である。同じく、現在発掘作業中のクフ王第2の船と「ピラミッド・タウン」の周辺も関係者以外の立ち入りを禁じられている。

(2) 遺跡保存整備の現状

①遺跡の劣化状況

遺跡の現状から明瞭に読み取れる劣化状況として、まずは遺跡全体の石材の風化と砂の堆積が挙げられるだろう。特に労働者の町が発見された地区の日乾煉瓦遺の風化については、以前から指摘されている (Johnson 2006)。マスタバ墓などの石材も、注意してみると表面が劣化し、風化に伴い削られている事が分かる (Fig.4)。

またクフ王第1の船の船坑から引き揚げられた蓋石は、発掘から60年足らずだが石材の表面が黒ずみ、観光客による落書きも目立つ (Fig.5)。石材が黒ずむ原因としては、風化の他にギザ遺跡を含めたカイロ全体の慢性的な大気汚染が考えられる。特にギザ遺跡は現代の居住域と遺跡が密接しているため、現代生活の環境汚染が遺跡に強く影響している。スフィンクス神殿前の地下水の上昇も、同様の原因によるもので、現在は地下水の汲み上げ作業が行われ水溜まりの範囲は縮小しているが、塩害や緑化といった遺跡への脅威の増幅が懸念される (Fig.6)。



Fig.4 風化した石材



Fig.5 クフ王第1の船の蓋石



Fig.6 緑化による遺跡への脅威 (カフラー王の河岸神殿脇)

②遺跡保存

先に述べたとおり、ギザ遺跡は主に古王国時代の墓地群によって構成されており、上部構造をもつ石造建造物が立ち並んでいる。また、特にマスタバ墓内には、精緻なレリーフと彩色が施されている。埋葬習慣だけでなく、古王国時代の人々の豊かな生活の一面をそれらのレリーフから読み取ることができ、研究資料としても第一級の価値をもつ。

遺跡の外部および周辺に対する保存整備として、第2章でも取り上げられたように、遺跡全体を囲むフェン

スが設置されている。この範囲は基本的にユネスコの
世界遺産に認定されている範囲に及んでいる。またギ
ザ遺跡では、この半年の間に個々の遺跡の周囲を囲む
ように新たな柵が設置された (Fig.7)。公開している遺
跡と、非公開の遺跡を区切り立ち入りを制限する目的
だと考えられる。

一方遺跡内部の保存整備はほとんど進んでいない。
公開・非公開にかかわらず、壁面装飾の保護は成され
ていない。未公開のマスタバ墓などの入口およびシャ
フト開口部には、基本的に鉄柵を設置し、内部への侵

入を防いでいる (Fig.8)。これにより内部の装飾等が保存されている。ただし、マスタバ墓が分布する Western cemetery、Eastern cemetery、Central cemetery では、発掘調査以降全く整備が行われていない遺跡や、鉄扉の老朽化が目立つ。クフ王のピラミッドでは一時、1日300人までの入場者数制限措置がとられたが、現在は形骸化し、定員数は守られていないものと思われる。公開されている3基のピラミッドの見学通路には、手すり、床板、階段、誘導灯、空調設備などが備えられている (Fig.9) が、停電の際は真っ暗になるため非常に危険である。その他に、遺跡の保存整備活動として遺跡の修復が行われている。代表的な例としてはスフィンクスの修復、カフラー王のピラミッドのクリーニングと強化措置が挙げられる (Fig.10)。



Fig.7 遺跡内に設置された新たな柵



Fig.9 遺跡入口の封鎖状況

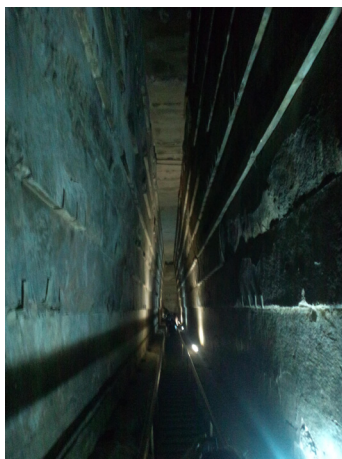


Fig.10 クフ王ピラミッド内部



Fig.8 スフィンクスの修復現状

(3) 観光インフラの整備状況

観光インフラの整備状況については既に高梨氏がまとめているが（高梨 2011）、本稿で改めて最新の現状を報告したい。

① 駐車場

遺跡内の駐車場はクフ王のピラミッド東側のゲートを抜けてすぐの場所と、カフラー王のピラミッド葬祭殿の東側、スフィンクス神殿向かいの出口からやや歩いた地点、遺跡北西のビュー・ポイントの計4か所設けられている（Fig.11）。



Fig.11 遺跡内に設置された駐車場

（左上：クフ王北東コーナー、右上：カフラー王の葬祭殿東側、下：スフィンクス神殿の向かい）

② トイレ、休憩所

広大な遺跡であるにもかかわらず、トイレや観光客が強い日差しを避けて休むことのできる施設等の整備はほとんどない。トイレはクフ王のピラミッド南東コーナー付近に設けられた仮設トイレ（Fig.12）と、太陽の船博物館内に設置されているものに限られる。いずれも用意されている数が少なく、一日に多くの観光客を受け入れる態勢としては不十分である。



Fig.12 仮設トイレ

③導線の確保、観光ルートの設定

ギザ遺跡には2か所の入口が設けられている。一つはクフ王のピラミッド東側にあり、チケットオフィスと手荷物検査場を備えている (Fig.13)。もう一つはスフィンクス正面に設けられており、入場券の購入と手荷物検査を行う小さなオフィスが設けられている。通常はピラミッド側の入口から入場し、スフィンクス正面から退場する流れとなっている。遺跡内には舗装道路が巡っており、団体客はこの舗装道路を大型バスで移動することで、広大な遺跡全体を短時間で回ることができる (Fig.14)。ただしタクシーや自家用車の乗り入れは制限されているため、個人旅行者は徒歩で遺跡を見学することとなる。尚、見学に関しては特定ルートは設定されていないため、見学する遺跡のバリエーションや順序は観光客やツアーガイド自身の裁量に任されている。このような場合、遺跡内に設置された案内板やルート表示が必要になるわけだが、ギザ遺跡の場合、その整備も遅れている。チケットオフィスにいたっても遺跡地図すら用意されていない。ただし、この半年の大きな変化として、遺跡内の個々の遺跡の位置関係を示す看板 (Fig.15) と、遺跡へのアクセスルートとして各ピラミッドの前にウッドデッキが完備された (Fig.16)。

④遺跡情報の揭示

先述の遺跡の案内板とも共通するが、ギザ遺跡内には、最近まで遺跡全体を示す地図などの設置は無かった。チケットオフィスにも設置されておらず、現在公開中の遺跡がどれなのかも明確に表示されていない。また、それぞれの建造物の構造や時代、内容などに付いての情報の揭示は、ごく一部の遺跡に限られ、プラン図なども載せられていない。さらには老朽化により、そのごく一部の遺跡にある案内板も見づらい状況であった。

しかし2013年2月に遺跡を踏査した際に、一部の遺跡で新たな案内板の設置が進んでいることを確認した。ステンレス製の看板で、時代やプランについての情報が記載されている (cf. 第2章第2節)。さっそく、ガイドが案内板を見せながら遺跡について説明するなどの光景が見られた (Fig.17)。

⑤ビュー・ポイント

ギザ遺跡の広大な遺跡群全体を眺めるためのビュー・ポイントが、遺跡北東に設けられている。舗装道路が敷かれており、大型バスで乗り入れることも可能である。しかしながらビュー・ポイントからの眺望はあまり良いとは言えず、遺跡全体を背後から見る形になるため、全体の分布や位置関係が把握できない。さらにマスタバや低位置にあるスフィンクス神殿等は、手前の砂漠によって遮られている (Fig.18)。

⑥博物館施設

ギザ遺跡内には、「太陽の船博物館」という博物館施設が設けられている (Fig.19)。1950年代にクフ王のピラミッド南側の船坑から解体された状態で発見された木造船を展示・公開する施設である。博物館は部材が埋納されていた船坑上に建てられている。ここでは遺跡の入場料とは別に、博物館入場のための追加料金を支払うことが求められる。

施設内は2階建てになっており、1階では船が埋納されていた船坑と蓋石の一部を見ることができる。また、発見から復元に至る様々な記録写真や、同時に出土した縄やマット等の関係遺物も展示されている。2階は復元された木造船の展示コーナーとなっている。船の両舷に沿うように2段構造の見学エリアが設けられているため、様々な角度から木造船を観察できるよう工夫されている (Fig.20)。

博物館内では、靴についた砂除けのシューズ・カバーの着用が義務付けられている。また直射日光を避けつつ、展示空間に適度な明るさを与えるために、南側の窓には日除けが掛けられている。共に木造船に対する保存環境や衛生管理への配慮が伺える一面である。



Fig.13 ピラミッド側入口（左：チケットオフィス、右：手荷物検査場）

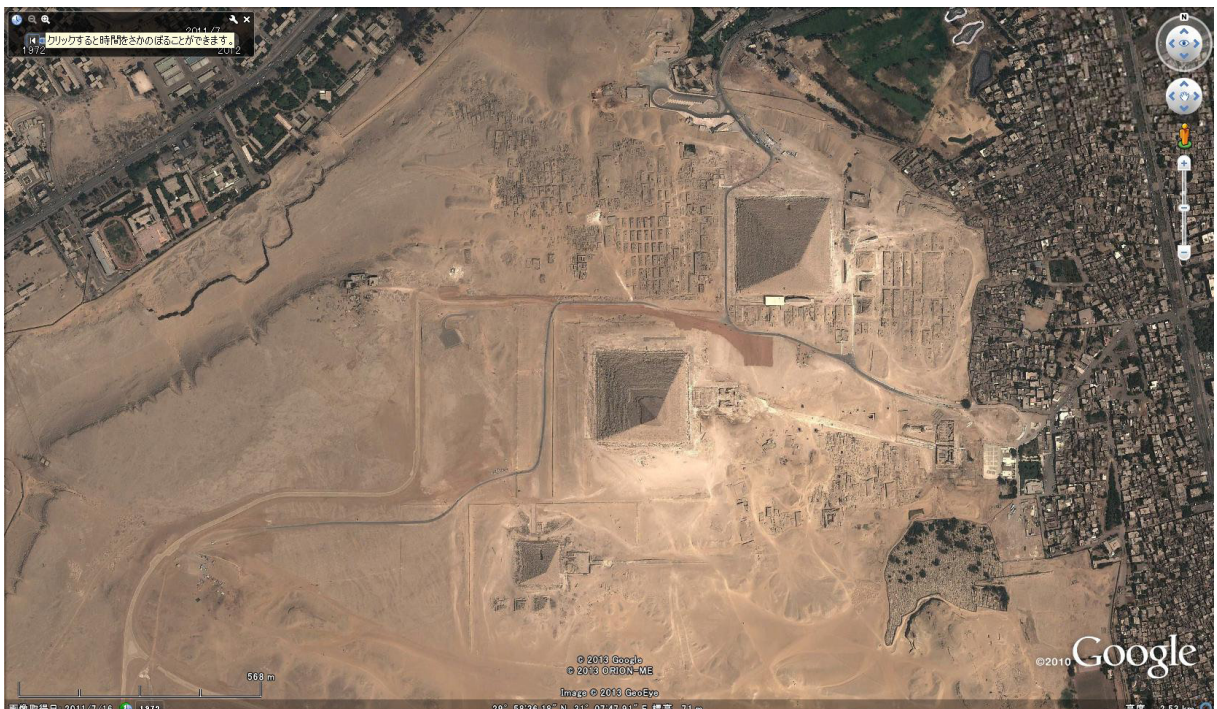


Fig.14 遺跡内を走る舗装道路

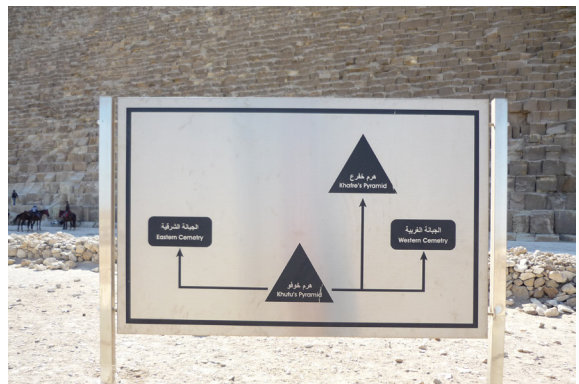
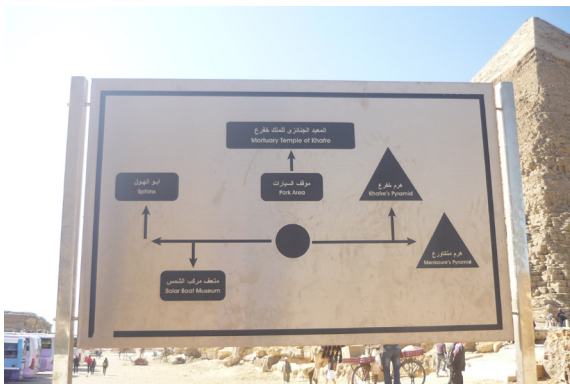


Fig.15 遺跡案内板



Fig.16 ピラミッド前のウッドデッキ

(左上：クフ王のピラミッド、右上：カフラー王のピラミッド、下：メンカウラー王のピラミッド)



Fig.17 遺跡情報案内（左：既設の古い案内板、右：新設された案内板）



Fig.18 ビュー・ポイントからの眺望



Fig.20 太陽の船博物館（ピラミッド手前の白い建物）



Fig.19 木造船展示スペース

⑦保安

遺跡には Tourist Police が駐在し、遺跡の安全と観光客の安全を守っている。それぞれの駐在スポットとしての建物も、最近新設された (Fig.21)。

ただし広大な遺跡全体の安全を管理するには、絶対的な人員数が少なすぎる。また Tourist Police 自身が遺跡の重要性と観光資源としての重要性を理解していないため、保安は不十分と言わざるを得ない。例えば、石造建造物によじ登ることは禁止されているはずだが、当たり前のように登っている観光客は後を絶たず、それに対する注意喚起もほとんど行われていない。遺跡の劣化を促進するとともに、観光客の安全も脅かされるなど、双方にとって悪影響である。後述する露天商による強引な客引きの黙認も、同様に観光客の安全を損なう。

ギザ遺跡には、遺跡区域を明確に規定するフェンスが居住域との間に設けられている。そのため外部からの不法侵入等は未然に防ぐことができる。このように遺跡の範囲が明確にゾーニングされている点は、他遺跡と比較しても非常に高く評価できる。ただし、現代の生活域の地下にあるクフ王のピラミッドの参道の一部と河岸神殿は、ユネスコが定めた世界遺産の登録範囲から外れている。また「ピラミッド・タウン」のすぐ南のゾーニングの境界線上には、民間のサッカー場が営業している (Fig.22)。

⑧その他

・ラクダ、馬車

ギザ遺跡では、遺跡に入場する手前から、多くのラクダ乗りや馬車の客引きが行きかっている (Fig.23)。彼らは個人旅行者など、遺跡内を車で回ることができない観光客や、砂漠の中をラクダに乗って周遊したい観光客を対象に仕事をしている。しかしながら、時に強引な客引き等も見受けられ、円滑な遺跡見学の妨げになる場合もある。また、ラクダや馬の糞尿等に対する具体的な対策が講じられていないため、遺跡内のいたるところに糞尿が放置され、悪臭を放つ。観光および遺跡環境の保護の観点から、かつてはラクダや馬車の遺跡内での商売を禁じる措置が講じられたこともあったが、近年は再び戻ってきているのが現状である。

・露天商

ラクダや馬車の客引きと同様に、観光客の円滑な見学を妨げている実情として、露天商の存在が挙げられる。観光客が進んで土産物を求めることに問題はないが、買ってもしない品を一方的に強引に押し付け、高額な対価を要求する姿がしばしば見受けられる。購入を拒んだ客に対し、どこまでも付きまとうという光景も珍しくはない。露天商の多くはチケットオフィスを抜けてすぐのクフ王のピラミッド前と、出口にあたるカフラー王の河岸神殿およびスフィンクス神殿周辺に集中している。特に、スフィンクス神殿では神殿の内部にも店が設けられており、遺跡の価値を下げ、景観や環境をも害している (Fig.24)。

・クフ王のピラミッド北東コーナーにある博物館廃墟

クフ王のピラミッドの北東に、古代エジプト風の装飾を施した近代建築が残っている (Fig.25)。1930年代まで博物館であったとされるこの廃墟は、現在は、ラクダ引きや警官の休憩場所と化し、景観を害している。

・サウンド&ライトショー (音と光のショー)

ギザ遺跡ではほぼ毎晩、音楽やストーリーと共に遺跡がライトアップされるサウンド&ライトショーが開催されている。見学者はスフィンクス前の観覧席から鑑賞することができ、日によって異なる言語で上演されている。昼間とは違った夜の遺跡を楽しむことができるため観光客には人気を博している。ライトアップのための照明設備は遺跡の至る所に配備されている (Fig.26)。



Fig.21 観光警察の駐在所



Fig.22 遺跡内にあるサッカー場



Fig.23 馬車



Fig.24 スフィンクス前の露天



Fig.25 博物館廃墟



Fig.26 サウンド&ライトの照明設備

4. 遺跡保存整備の問題点と今後の方向性

ここまでギザ遺跡のエジプト学的特質を理解した上で、遺跡の現状を見てきた。以下では遺跡保存整備の現状の問題点を整理し、今後の方向性についてまとめる。

(1) 保存整備の不均質および老朽化

まず全体的な問題として、ギザ遺跡の保存整備の度合いが不均質である点を指摘する。ギザ遺跡は、エジプト国内で初めて遺跡保存に関する具体的な提案と整備が行われた遺跡である。従って、全体的な遺跡保存整備はエジプト国内の遺跡の中でも最も進んでいるといえるだろう。しかし、ピラミッドを始めとした観光資源優先の傾向が強く、遺跡全体の保存整備の程度は不均質である。また国際的会議の場で保存整備の不十分な点を問題視され対策を講じるよう求められる度にその都度整備を重ねてきたため、遺跡整備の方向性も一定ではない。特にギザ遺跡の保存整備の度合いは公開か非公開かによって大きく異なる。加えて、世界遺産に登録された1979年からすでに30年以上経過しており、保存整備のための設備や施設の老朽化が目立つ。

保存整備の不均質はとりわけ、Eastern cemetery と Central cemetery、そして「ピラミッド・タウン」を初めとしたギザ遺跡の南の区域において顕著である。マスタバ墓の入口およびシャフト開口部の封鎖は不完全であり、遺跡と観光客の安全の双方が守られていない。またカフラー王の河岸神殿の東側および「ピラミッド・タウン」の日乾煉瓦遺構の風化に対する保護が不十分である。「ピラミッド・タウン」については、遺跡区域内にもかかわらず、サッカー場が隣接していることが不適當である。サッカー場の地下に遺跡が埋蔵されていることは、現状のプランなどからはほぼ確実といえるため、今後施設の撤退と発掘区域の拡張が望まれる。

次に、カフラー王、メンカウラー王の葬祭殿の整備が整っていない点を指摘する。両王のピラミッドは公開に先立ち修復が行われ、整備が整っているが、一方で葬祭殿は現在ではそのプランも判断できない状態であり、船坑も保護されていない。内部は後世の石材の再利用目的で荒らされたまま放置されている。ピラミッドや葬祭殿を含めた複合体は、その全体をとらえることで初めて古王国時代のピラミッドの意味や葬祭儀礼への意識を認識することができる。従って現状の様な保存整備の不均衡は、単に研究を遅らせるだけでなく、一般に対してもピラミッド複合体の本来の意味を周知するに十分な状況とは言い難い。

(2) 保存修復に関する諸問題

遺跡保存の観点からもいくつかの問題点が指摘できる。まず公開されているマスタバ墓内の壁面装飾などに対する保護措置が不十分である。特に壁画の彩色の劣化という点では、不特定多数の人間が触れることのできる現在のような環境は好ましくない。また温湿度管理等も行われていないため、長期的な遺跡保存においては後世の脅威となりうると考えられる。

さらにギザ遺跡では数多くの保存修復作業が行われているが、その復元の手法は一定では無い。また過度の復元により実際の遺構のプランの確認を妨げたり、周囲と景観との調和が損なわれている場合が時折見受けられる。遺跡の保存修復を推進する点は評価できるが、その手法などに関し専門家の意見を取り入れ、修復に従事する人員にレクチャーの受講を義務づける必要があると考える。

同じく保存修復の観点から、クフ王の船の船坑を覆っていた蓋石の保存についても再検討すべきと考える。現状では、第1の船の蓋石の一部が博物館の東側に安置されている。ただし劣化が激しく、蓋石に記されていたインスクリプションなどは既に確認できない状態である。先に述べたように、第1の船の蓋石に書かれたイ

ンスクリプションは労働者組織等の解明において重要であり、第2の船の発掘を受けて今後は第1の船との比較研究等が求められる。またこのような石材に書かれたインスクリプションは、ギザ遺跡の様々な石材に遺されている。今後石材のクリーニングと保護対策だけでなく、蓋石の移動等も含めて具体的な検討がなされることが望まれる。

(3) 観光に関する諸問題

その他に観光インフラに関する問題点も山積している。本来であれば、ギザ遺跡のエジプト学的特質に挙げたような遺跡の重要性や魅力、歴史的価値について、研究成果をふまえ、より多くの大衆に関心を持たせ、訴えかけるような整備が好ましい。しかし一方で遺跡整備は、遺跡の景観や環境保護、そして観光産業と表裏一体であるため非常に繊細かつ複雑なバックグラウンドをもっている。そういった複雑な側面を理解した上で、以下の問題点を指摘したい。

まず現状の観光インフラは、大勢の観光客を常時受け入れる体制が整っているとは言えない。トイレや休憩所、遺跡案内の不足、ビュー・ポイントの位置の悪さ、動物の糞尿や悪臭、土産物屋の乱立、悪質な客引きなどは、円滑な見学を妨げになるほか、遺跡全体のイメージを損ねる。したがって、新設や移転、撤去などの早急の改善が求められる。さらに、一度実行された保存整備計画の一部が、遵守・継続されていない状況に警鐘を鳴らすべきと考える。特にピラミッドへの入場者数の制限と、遺跡公開のサイクルが守られていない点は長期的な遺跡保存を考える上で危険要素である。入場者数を制限しないことにより、オーバーユースになる危険性がある他、常時公開していることで内部の劣化が進行することも考えられる（高梨 2007）。今一度、適正な入場者数の再検討と現行の遺跡公開サイクルの是非について議論が必要であろう。一度に全ての遺跡を見学出来ないことは、観光客にとってデメリットであるかもしれないが、一方で見学出来なかった遺跡を求めてリピーターを獲得できるなどの観光産業面でのメリットもあると考える。

(4) 景観と環境に関する諸問題

ギザ遺跡には遺跡の景観と環境を害する様々なものが点在している。その多くは観光インフラの整備によって引き起こされた二次的脅威に該当するものである。たとえば景観問題として、遺跡内に設置された駐車場、博物館廃墟、サウンド&ライトの照明設備などが考えられる。また環境問題としてゴミの堆積、塩害、大気汚染などが挙げられる。景観問題については、移動や撤去、景観に配慮した設備の導入などを検討するなどして早急に改善を求めたい。一方、環境問題については早急に対応することが難しいと思われる。環境対策における専門家の意見を交えて長期的な対策ビジョンを打ち出すこと、環境汚染の度合いについてモニタリングを行うことなどで地道に努力していくことが重要ではないだろうか。

5. エジプト革命後の遺跡保存整備の変化

2011年1月のエジプト革命以後、エジプトにおける遺跡や文化財の盗掘・盗難行為が横行していることは既に各国のメディアにより広く伝えられている（第2章第4項参照）。ギザ遺跡も例外では無く、革命直後に遺跡内にあった遺物倉庫が襲撃に遭うなど革命とその後の政治的混乱の影響を受けた。幸いギザ遺跡内の盗掘被害等は比較的少なかったが、観光産業におけるダメージは深刻な問題である。

エジプト革命を受けて、遺跡の保存整備状況はやや変化したように思われる。特に公開遺跡の一新と、遺跡

内の案内盤やアクセスルートの整備がここ半年で急速に進んだ。これまで遅れていた観光インフラの整備に力を入れている一面が看取される。一方で、公開遺跡が一新されたことで、従来の遺跡公開サイクルは乱れ、公開される遺跡はより集客力の高い遺跡に集中しているように見受けられる。遺跡保存やギザ遺跡の重要性を正しく一般に普及させるといった点で、今後公開する遺跡の選定や頻度について再検討が必要であると考えられる。

6. おわりに

本稿ではギザ遺跡におけるエジプト学的特質を整理し、遺跡保存整備の現状と問題点、また革命以後の状況について触れた。ギザ遺跡は世界的にも著名であり、世界遺産登録のきっかけともなった3大ピラミッドを初めとした古王国時代の石造建造物を数多く遺している。古代の埋葬習慣や生活習慣を研究する上でも最重要遺跡である。またその重要度はエジプトの観光産業においても同等の価値を持っているといえよう。

現状と問題点の総括として、ギザ遺跡では第一に、現在進行中の遺跡の保存整備を徹底することを求めたい。中途半端な保存整備は反対に遺跡の景観を害することにもつながり意味を成さない。ギザ遺跡はエジプトを代表する遺跡であるとともに、エジプトにおける遺跡保存整備の指標となるべきである。さらにはエジプト国内の遺跡保存整備をリードする地として、従来の観光のための遺跡整備から、文化財および遺跡保存のための整備へと方向性を見直す必要があると考える。特に、ここ半年で急速に進んだ観光インフラの整備は、衰退しつつある観光業への対応策の一部と考えられるが、長期的な遺跡保存との調和について十分な議論のないまま、遂行されている。数年後このような整備が、再びギザ遺跡の遺跡保存整備に暗い影を落としかねない。もちろんギザ遺跡ほどの広大かつ著名な遺跡においては、エジプト考古省や考古学・エジプト学関係者だけでなく、その他にも様々な利害関係者が存在し、問題解決を困難にしている現状も理解できる。しかしながら、世界遺産委員会や学会で提示された保存整備計画を全うし、景観や遺跡環境との調和に配慮した観光インフラの充実を図っていくことが、今後のエジプトにおける文化遺産の保護と、革命により衰退した観光産業の復活につながるのではないだろうか。

註

- 1) ギザ遺跡の大まかな区画名称は、ギザ遺跡の発掘を行った G. レイズナーにより定義された (Reisner 1942)。現在でもその区画名称は一般的であり、クフ王のピラミッド東側のマスタバ墓群は Eastern cemetery、西側は Western cemetery、そしてギザ台地の中央に位置するカフラー王のピラミッドの参道脇は Central cemetery と呼ばれる。とりわけ、Eastern cemetery と Western cemetery の両区画では規格化されたマスタバ墓が整然と並ぶように造営されている。
- 2) ギザ遺跡の概説は研究報告書第1号第4章に既に掲載されているため、本稿では詳細を避ける。詳細は近藤、河合 2011 を参照。
- 3) Giza Archives <http://www.gizapyramids.org/code/emuseum.asp>
- 4) Giza 3D <http://giza3d.3ds.com/#discover>
- 5) <http://english.ahram.org.eg/NewsContent/9/40/55372/Heritage/Ancient-Egypt/After-a-yearbreak,-Khafres-pyramid-and--royal-tomb.aspx>
- 6) 2013年2月に遺跡見学した際は、Eastern cemetery の北西隅のマスタバ墓 (おそらく G7102) も公開されていた。

